

## 果てしない旅

南成瀬小学校 六年

さいとう  
りお  
斉藤 葉音

今は西暦二千二百三十年。人類が起こした最期の大戦争から約二百年経つ。最初は小さな国同士での戦争であったが、小さな国を助けている国も次々に参加し、気が付けば世界中を巻きこんだ第三次世界大戦へと発展していつてしまった。相手国を完全に滅亡させようとお互いに持っているほぼすべての核爆弾を使ったからか戦争をしている国だけでなく、世界中の人々が核の被害に合い、地球上のほぼ全ての人や動物が死に、限られた一部を除いた全ての都市や土地が汚染されてしまった。

生き残った人々は過ちを反省し、とにかく生きていくことを最優先とした。幸いにも、残っていた地域は暖かく、人類の最期を予想した賢い人がいたため、百年間での文明の進歩はすばらしいものとなった。例えば、医学は進歩し病気はほぼなくなり、汚染された地域で多くの実験ができたおかげで宇宙技術も発展し、宇宙船を完成させた。しかし、その百年間の間も汚染がどんどん進み、人類が地球を離れなければならない時が来た。

その後の約百年間の間、人間は宇宙空間の旅を続けて、住むべき星を探している。百年間は長い時間であるが、宇宙の間では全くそうではない。地球を離れてからというもの、まだ住めそうな星はなく、この先もしばらくはない。ただ、あのまま残っていてもいつかは地球が滅亡するのは分かっていたので、外に行くしか手段がなかった。

宇宙船での生活は悪くない。食べ物も豊富だし、運動する場所も十分にある。人類が持っている全ての知識にすぐにアクセスできるので、学校にいかなくてもいい。私の仕事はこの広い宇宙空間から人類が住めそうな星をいち早く探すこと。正直なかなか見つからないが、よさそうな方向は決まっているので、今は毎日そのあたりを探し続けている。うまくすればもうすぐ見つかりそうだ。いや、間違いなく見つかると思う。

「船長、船内の確認終了しました。五番ブースの管にて異常があったのですぐに修理いたしました。」「ご苦勞。行先のない旅はまだまだ続くから、くれぐれも大切な脳たちに十分な酸素が行くように監視を続けておいてくれ。」「もちろんです。いつか見つかる星を目指して、一万个の脳は常にAIで監視しています。」「

実は私には体がない。もちろん、手もないし、足もない。あるのは脳だけ。核爆弾の環境汚染がひどく、被爆をした人類は、体の機能がおかしくなってしまった。また、放射能汚染がひどく、食料を育てることがとても難しくなってきた。そこで脳だけをクローンで

増やし、十分な栄養と知識を与え、人類は生きながらえてきた。船長の体はロボットで、見た目は普通の人間と何も変わりはない。しかし、脳以外はロボットなので、病気もしないし、痛みも感じないし老いることもない。脳に十分な栄養がとどけば、それでいい。顔も体も好きなように選べる。いいことしかないように思えたが、一つ大きな問題があった。体を失うと同時に、人類は感情を失った。なぜかは分からないが、悲しくないし、怒ったりもしない。甘えたくもならないし、ぐちも言ったりしなくなった。私たちはただ仕事をやるだけでよくなった。

とうとうその日は来た。住めそうな星が、みつかったのだ。私がずっと監視していた方向から地球に似た星を見つけた。十分な光と酸素があり、気温も問題なさそうだった。水も十分にあり、植物が生存していたが、動物らしきものは生存していない様子だった。百年以上がしてきたものが、あと少しで手に入りそう。さっそく報告したいと思った。たん、なぜか今まで経験したことのない感覚を受けた。なんと表現していいかわからないが、とても不思議な感覚だった。この感覚を受けた後、私はなぜか星の発見を報告することをしなかった。つまり誰にも発見したことを言わなかった。そして、あの発見から千年経ったが今でもこの船で地球人は漂っている。地球に似た星を見つけられたのは私だけじゃないはずなのに、いまだに人類は宇宙の中をさまよっている。

審査員講評 \*\*\*\*\*

ずっと探していたものが見つかった時、人はどんな感情になるのだろうか。物語の解釈を読者に委ねるような、素敵な余韻の残るラストがとても印象的でした。一万個の脳や、5番ブースの管など、細かいディテール設定がされているところも物語にリアリティーを感じさせることに貢献していたように思います。